

# 「大学入学共通テスト」その先に見えるもの

親和女子高等学校  
山科祐一

## 一 はじめに

「大学入学共通テスト」（以下「共通テスト」という正式名称ならびに「共通テスト」マーク式モデル問題例が今年七月一三日に発表され、五月一六日に大学入試センターから発表された記述モデル問題例とあわせ、諸先生方も様々な感想を抱かれたと思う。すでに発表されている記述式問題イメージ例（たたき台）と比較する中で、やはり、複数の記述問題を課すということと、図表や資料等を用いた問題が作成され、トータルではマーク式八〇分十記述式二〇分一〇〇分のテストになるだろうという方向性は間違いなさそうだ。

では、現在の授業は通用しなくなるのか。逆に、「共通テスト」といっても、結局、私たちがやるべきことは同じなのではないか。この辺りがもやもやとしたまま、来年四月には「共通テスト」を受験する高校生の入学を迎えようとしている。この漠然とした不安を少しでもクリアにし、胸を張って次年度の新入生を迎えるため、「共通テスト」やアクティブラーニング（以下AL）について、実践例も含めて考えてみたい。

## 二 「新学習指導要領」

まず、「共通テスト」を考えるに先立って、二〇二二年度から高等学校で順次実施される新学習指導要領について触れておく必要がある。新学習指導要領では知識基盤社会の到来を前提に、子供たち一人一人が予測不能な変化に受け身ではなく、主体的に向き合って対処できる

「生きる力」を身につけることが重要だとする基本的な方向性が示されている。

今回の改訂が目指すのは、学習の内容と方法の両方を重視し、子供の学びの過程を質的に高めていくことである。単元や題材のまとまりの中で、子供たちが「何ができるようにするか」を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と、「どのように学ぶか」という学びの過程を組み立てていくことが重要になる。「何を学ぶか」を学力の三要素として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持つて多様な人々と協働して学ぶ態度」と位置づけ、これらを身につけるために「どのように学ぶか」を考えると、ALの三つの視点から、学習過程の質的改善を不断に見直し続けることが重要である。

## 三 ALの三つの視点

中央教育審議会（以下中教審）の答申によると、ALの三つの視点とは「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」であると示されている。ここで大事なことは、中教審は、ALは本来、資質・能力を育成するための視点であり授業の「型」ではないにも関わらず、その趣旨が学校等に十分伝わっていないように感じられること、活動に注目が行き過ぎていて、活動そのものではなく、活動が学びにどのようにつながるかが重要であること等の懸念を指摘していることだ。

また、ALの三つの視点による学びに向けた学習・指導の改善・充実のために、ICTを活用することも効果的であると指摘している。

#### 四 アクティブラーナーがやってくる

さて、こういった背景を踏まえ、私たち高校現場に大きな波が押し寄せようとしている。事実、諸先生方がご指導されている教育実習生からその波を肌で感じているのではなからうか。付箋を用いたシンキングツールの活用、グループワークとワークシートによる発表形式の授業等。これらはA.L.を教育の型として実践しようとする実習生の姿に他ならない。これはもちろん、大学での指導が次期指導要領を見据えたものとなっていることの表れだ。私の話になって恐縮だが、私は昨年度、小学校の教員免許状を取得すべく大学の通信教育を受けたのだが、スクーリングにおいて、指導案作りや模擬授業等を多くの学生とグループで行ったが、小学校現場ではもはやA.L.の視点での授業の組み立てや評価が当然のものとなっていることを実感し、衝撃を受けた。

そして、例えば、今年度の兵庫県における小学校教員採用試験の書類選考において、全員に課されたのが「児童生徒の自ら学ぶ力を高めるための指導とは」というテーマの文章作成である。滋賀県では「主体的・対話的で深い学びの実現のための指導」というようなテーマでの小論文が課されている。小学校現場、さらには、中学校現場でもA.L.はどんどん取り入れられており、採用段階ではもはや不可欠の要素として求められている。つまり、近い将来、高校現場にはA.L.の視点に基づいた授業で育ってきたアクティブラーナーたちがやってくるということである。彼らを前に、もはやA.L.の視点を持った授業をするか

どうか、等という議論自体が意味をなさない。

#### 五 A.L.の視点を取り入れる

とはいえ、これまでと全く異なる指導方法を導入しなければならぬと浮足立つ必要はなく、これまでの教育実践の蓄積を若手教員にもしっかりと引き継ぎつつ、授業を工夫・改善する必要性を新指導要領では求めている。

ということは、A.L.の一人歩き(型だけの実践)に懸念を表明した中教審の論点整理も含めて考えると、こういうことになるのではなからうか。

自分の授業計画をA.L.の視点で再検討し、一つ一つの教材をもっとも活かす授業方法を再構築することである。以下、具体的にいくつかの私自身の実践例を紹介しようと思う。

#### 六 『富嶽百景』再構築

国語総合における定番教材である『富嶽百景』はこれまでに何度も授業してきたことのある教材であるが、A.L.の視点で再検討を試みた。まず、教えたことは次から次に出てくるのだが、いったんこれを抑えて、学力の三要素を改めて思い出したい。「知識」や「思考力」についてはこれまでの一斉講義形式である程度はクリアしているといえる。「技能」「判断力・表現力」「主体性を持つて多様な人々と協働して学ぶ態度」についてはどうだろうか。残念ながら、これらはやはり十分に満たした授業をできていない。では、これら不十分な点を満たしていくために「どのように学ぶか」を考えてみると次のよう

な疑問が浮かんだ。「富士には月見草がよく似合う」という表現を生徒たちが「そういうことか!」と感動を伴って理解できる、そういう主体的で深い学びをどうすれば提供できるだろうか。

これまでの私の授業を思い出すと、『富嶽百景』を終えた後、生徒たちが図書館に駆け込み太宰作品を手にとって見たことがない。説明すると「へー」といって納得した顔はしてくれないが、帰宅後に教科書を味わい読み返すこともない。調査ではノートを覚えることがすべてとなる。とても、主体的・対話的で深い学びとはいえない。

##### ① 「ワークシート」の利用

そこで、私の一斉講義の前に生徒たち自身に「ワークシート」を配布し、八つの問いに解答していくことを要求することにした。もちろん、これだけではただの問題演習形式であり、主体的な学びとはほど遠い。

##### ② 「グループワーク」の利用

そこで、次の手として、各個人でワークシートを埋めた後、八つのグループに分け、グループ毎に一間を割り振り、その問いについてグループワークでその解答を交換し、グループとしての解答作りをするように一手間加えることにした。

##### ③ 「ジグソー法」の変形利用

次に、ジグソー法を少し変形させ、グループの中から「先生チーム」と「生徒チーム」に分かれてもらい、先生チームのメンバーは、残り七つのグループを順次移動し、自分たちの考えた解答と解説を七回繰り返す。生徒チームのメンバーは各グループの先生チームから解答と解





▲図書館で調べ学習をする生徒たち

### ③ 「朗読」の実施

次に、教科書にある詩について、どんな点が優れていると感じるのか、どんな気持ちでこめられているのかをワークシートに書かせる。その上で、この詩の魅力を伝えるにはどのように朗読するかを考えるよう要求した。強弱、抑揚、リズム、高低、ブレスの五項目を挙げることで、色々な読み方を試行錯誤しやすくした。

### ④ 「タブレット」の活用

そして、ペアワークを採用し、実際に、ペアの仲間に向かって朗読した。聞き手はタブレットを用いて動画撮影をしながら、真剣に聞く。そして、読み終われば、

自分が感じた感想を紙手に伝え、読み手はそれを書き写す。それから、自分の朗読動画を再生し、聞き手の感想を実感、そして、伝えなかった感情を表現できたかの確認をする。そして、交代。ペアワ



▲タブレットを活用した授業の様子

ークを終えれば、演劇部や放送部の生徒を中心に、何名かに全体の前で朗読してもらおう。

### ⑤ 「フォトポエム」制作

そして、最後の仕上げは「詩作」である。遠足等の学校行事を絡め、その行事中に写真を一枚撮り、詩を考えてくること、という課題を課しておく。授業では、コンピューター教室のPCを用いて、各自が準備済みの写真と詩を加工して組み合わせフォトポエムを制作する。そして、電子黒板を用いて、全員の作品の鑑賞会を実施した。

#### A 時間配当

- 1 時限 ↓ ①
- 2 時限 ↓ ②・③の前半
- 3 時限 ↓ ③の後半・④
- 4 時限 ↓ ⑤

#### B 授業後の変化

もちろん、私の授業力の未熟さによるところも大きいのだが、これまで、「斉講義形式で詩を扱っていたときは、生徒たちは「正しい鑑賞」らしきものを説明されて、頭で理解し、テストに向けて暗記しているだけであった。また、詩作をさせても、ごく一部の生徒を除き、嫌々やらされていくということがよく伝わってくる内容であった。

これが、今回の再構築によって大きく変貌を遂げた。「主体性を持つて多様な人々と協働して学ぶ



▲フォトポエムの作品例

態度」「表現力」については、取り組みの特性上、クリアできたことは想定通りである。だが、「知識・技能」「思考力」の変化に目を見張るものがあつた。生徒のフォトポエムには随所に詩の技法が用いられており、また、仲間の用いる技巧に気づくが故の感嘆の声が、鑑賞会では何度も聞こえた。

### 八 「共通テスト」出題に関して

それでは、いよいよ、共通テストについての考察に入っていきたい。

これまでの文部科学省並びに大学入試センターからの発表のポイントをまとめていく。高大接続システム改革会議「最終報告」(二〇一六年三月三十一日)の内容及び国公私立大学・高等学校関係者等の審議等を踏まえ、「二〇二一年度大学入学者選抜実施要項」には、大学入学者選抜に係る新たなルールについて、各大学の入学者選抜において、卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針を踏まえた入学者受入れの方針に基づき、「学力の三要素」を多面的・総合的に評価するものと改善する、とある。

また、評価すべき能力・問題類型等として、  
1、多様な文章とともに、図表等を含めて、複数の情報を統合し構造化して考えをまとめた  
り、その過程や結果について、相手が正確に理解できるよう根拠に基づいて論述したりする  
思考力・判断力・表現力等を評価する。

2、最終報告において、学力の三要素を踏まえつつ、大学における学修や社会生活において

必要となる問題発見・解決の能力等の諸能力を有しているかどうかを評価することが一層重要であるとして、共通テストでは、特に、

- 1、内容に関する十分な知識と本質的な理解を基に問題を主体的に発見・定義し、
- 2、様々な情報を統合し構造化しながら問題解決に向けて主体的に思考・判断し、
- 3、そのプロセスや結果について主体的に表現したり実行したりする

ために必要な諸能力をいかに適切に評価するかを重視すべき、という観点から作問を行うことが示された。具体的には

- A、「テキストの部分の内容や解釈」(テキストの部分把握、精査・解釈して解答する問題)
- B、「テキストの全体の内容や解釈」(テキストの全体把握、精査・解釈して解答する問題)
- C、「テキストの精査・解釈に基づく考えの形成」(テキストを基に、考えを文章化する問題)
- D、「テキストの精査・解釈を踏まえた自分の考えの形成」(テキストを踏まえて発展させた自分の考えを解答する問題(解答の自由度の高い記述式問題))

であり、作問検討チームでは、これらの分析を踏まえ、共通テストの記述式問題として、A・Cについて条件付記述式として出題することとした。なお、Dについては、解答の自由度が高いことから個別選抜になじみやすい問題であり、個別選抜において出題することが望ましいとされた。また、素材選定の工夫の例として

- ・論理的な内容を題材にした説明、論説等
- ・新聞記事・社説、会議等の記録、実務的な文章(取扱説明書、報告書、提案書等)、契約書や法令の条文、公文書等
- ・統計資料(図表・グラフ等)を用いた説明等を挙げている。

### 九 「共通テスト」へ向けた授業改革

これらの発表を紐解くと、現行のセンター試験が担うのがA・B、国公立大学前期試験等の個別試験における学科試験がC、国公立大学後期試験や推薦入試等の個別試験における小論文等の試験がDと考えられる。

一方、共通テストではCを組み込み、なおかつ、個別試験でもDだけでなく、Cを重ねて問うことを要求している。

#### ① 記述力の育成

ここから、まず一つ目として「記述力の育成」を重視した授業にする必要がある。大学入試センターは第一回モニター調査でマーク式にしていた設問を第二回モニター調査で記述式に変えている。その結果、正答率が大きく下がっていることに注目しており、共通テストでは、この記述問題でどこまで高得点をとれるかがポイントになりそうだ。

そこで、日頃の授業や定期考査等でもなるだけ記述式で書かせる訓練をすべきであろう。また、副教材等を採用する場合、マーク式の問題を選択肢を見せずに記述解答させてみるのも有効だ。

#### ② 統計資料の読解力育成

次に、「統計資料の読解力育成」を授業の中に反映させていく必要がある。例えば、文章読解能力の根幹に幅広い読書活動があるように、統計資料を読み解くには、様々な統計資料に触れていく必要がある。

これが実は私たちにとって相当やっかいな相手となりそうだ。例えば、社会科学系小論文で図表を読み取る問題がある。これを唐突に授業に持ってくる流れは難しい。さらに、生徒全員に図表分析型小論文を書かせて、それらを全員分添削するとすると、想像を絶する負担となる。しかも、共通テストを考えたときには八百字を超える小論文指導は効率的にも思えない。ここ数年急増している高校入試の問題を参考に資料慣れさせていくことが、ベストではないが当面の対処法か。

#### ③ 対話型の問題への対応力育成

モデル問題例を見ると、マーク式であれ、記述式であれ、テキストに対する対話型の問題や複数のテキストを見比べる問題が見受けられる。センター試験の過去問を紐解けば、二〇一六年度のセンター試験本試験を含め、対話型の出題例は数例存在している。また、複数の文章を読み比べて解く問題も、個別試験や小論文入試等では既出といえる。

ただし、このスタイルへの対策をどうするかという点、これは簡単ではない。なぜなら、複数のテキストを読み比べて進めていく教材は教科書にはなく、また、一つの作品をしつかり

と授業していくことが基本だからだ。そして、複数のテキストを読み比べるためには、当然の前提として、一つ一つのテキストが正確に読める必要がある。結果、この種の問題への直接的な対策を講じることは時間的にも困難となっている。

## 十 「共通テスト」とALの関わり

そこで、先に述べたALの視点が共通テスト対策を見据えた授業を組み立てていく一つの方向性となるのではないか。

例えば、「詩」の授業でいえば、前章の③の対策の一つとなっていないだろうか。詩を深く読み込む、見比べる、周囲の仲間と評価し合う。例えば、『富嶽百景』の授業では同じく前章の①③の対策の一つとなっていないだろうか。八つの記述問題、内一つを深く対話的に思考していく。そして、全問を対話的に学んでいき、最後は主体的に解答を模索する自学へとつながる。

また、今回、紹介はしていないが、国語総合の教科書の表現編等では、プレゼンテーションやパネルディスカッション等についても記載してある。「調べ学習↓グループワーク↓発表」というALの典型的な「型」であるが、これはもちろんプレゼンテーションをすることが目的であってはならない。目的の一つは「スタディスキル」を磨くこと。言い換えると、プレゼン等の技術的な運用力を高めること。そして、より大切なことは、調査・対話・協働・議論・発表といった思考の中でどのようなことを生徒が

学んでいくのかということである。具体的には、交通事故の図表を見比べながら、自動車事故、高齢運転者、死亡率の低下、シートベルト・エアバッグ、自動運転、こういった様々な関連ワードに知識が広がり、さらにそこから、死亡事故減少の背景にある医療の発達や救急車不足問題、自動運転化による物流業界の人手不足問題への対応等、より広範な知識テーマを学んでいくことである。こういった学びは、調べ学習やグループワークの中から生まれてくる。

このように考えたとき、実は、このプレゼン型授業は前章②の対策の一つとして機能していることがわかる。現在は、こういった授業形態は定期考査との相性があまりよくないため、授業に取り入れることに二の足を踏む先生方もいらっしゃると思う。

だが、共通テストのモデル問題例が示唆するのはALの視点により、次期学習指導要領が求める質の高い学力のチェック機能ではなからうか。これまでは様々なワークショップや講演会等で「アクティブラーニング型授業については、すぐに結果を求めるのは難しい。そういう視点とは切り離して考えましょう」と聞くことが多かった。

しかし、質の高い学力を生み出すために、ALの視点を用いて学力の三要素を聞こうとする「共通テスト」の方向性を考えると、AL視点での授業が「数値化」されて「評価」されるようになると考える方が妥当だと思えてならない。

もちろん、学力の三要素の中には、知識・技能や思考力もあるわけで、その意味では、古典

分野をはじめ、漢字や言葉の意味等、これまでと変化のない部分も多い。さらには、グループワーク等を用いて生徒たちに「預ける」ことで、本来到達すべき内容に行かず、非常に表面的な理解を互いにするだけでは質の高い学力とは到底いえない。

だから、スタディスキルを身につけるまでの伴走はこれまで通りしていく必要がある。また、必要な知識をしっかりと身につけていくために、漢字テスト等の学習支援も欠かせない。事実、私は、それぞれの教材の前に、ALの視点から生徒たちがどのようなことをどれだけ学べるか考え、授業を再構築しているが、それは四五分間の話で、授業冒頭の五分間は毎授業必ず漢字テストを行っている。そして、間違い直しややり直しを日々要求している。つまり、なんでもかんでもすべてAL視点でやるという訳ではないだろう。

## 十一 さびしい

本年一月に五万人の大規模プレテストが実施され、さらなる検証や情報開示がある。もしかすると本稿での予測と異なる試験になるかもしれない。あくまで、七月一三日までの発表を分析した結果であることはご容赦いただきたい。とはいえ、共通テストやアクティブラーナーの到来という荒波を前に、先手を打った授業作りをしていこうという先生方の考えるきっかけになれば、と思う。諸先生方の様々な実践を共有しあっていければ、と私自身、一層アクティブに学んでいきたい。